
鏡

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡

【Nコード】

N2832G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

中国南北朝時代。生き別れになろうとしている夫婦は互いに鏡を半分持ち合いそれを見つけた時会おうと約束し遂に夫は妻のその鏡を見つけ。史実にあったお話です。

第一章

鏡

国が滅びようとしている。そんな時だった。

中国で長きに渡った戦乱の時代が終わろうとしていた。南北朝時代末期、南朝の陳は今北の隋の攻撃を受け滅びようとしていたのだ。「陛下は何処だ!？」

「わからん」

宦官達は皇帝を探していた。だが何処にも姿は見えなかった。廷臣である徐徳言も彼を探していた。しかし皇帝の姿は宮殿の何処にもないのだった。

細面で色白の美しい顔立ちをしている。文化が花開いた南朝の貴公子らしい容姿だった。しかし今はその華やかな容姿を取り乱させて。皇帝を探しているのだった。

広い宮殿の何処にもいない。途方にくれた彼は彼と同じく皇帝を探している宦官の一人とすれ違いその彼に対して尋ねるのだった。

「陛下は」

「わかりません」

だがその彼もまた途方にくれた顔で首を横に振るだけだった。

「何処なのか」

「そうか」

「それよりも徐徳言殿」

ここで宦官は彼自身に声をかけてきた。

「貴方もお逃げ下さい」

「私もか」

「そうです。隋軍は既に都に入っております」

「うむ」

そういった状況なのだった。既に隋軍は長江を渡り都に入っていたのだ。都建康の陥落はもう疑いようのない事態だったのだ。だか

らこそ彼に対してこう言ったのである。

「ですから。もう」

「落ち延びよというのか」

「陳はもう終わりです」

宦官はこつも彼に告げた。

「ですから。もう」

「………そうか」

徐徳言は彼の言葉を聞いてその場に立ち止まってしまった。そうして頂垂れるだけしかできなくなってしまったのだった。滅亡が近いことは彼もわかつていたことだったからだ。

「そうだな。それでは」

「はい、そうかと存じます」

宦官はまた彼に告げた。

「私は。せめて陛下をお探しして」

「そなたは逃げぬのか」

「私は宦官です」

寂しい笑みと共の言葉だった。宦官は後宮において皇帝や宮廷にいる彼の妻妾の世話をするのが仕事である。確かにナを出すのとはばれる奸物達も多くいたが皇帝に対する忠誠心の篤い者もいたのである。彼は後者であつたのだ。

「ですから」

「そうか。それではな」

「お達者で」

「うむ、そなたもな」

こう言葉を交えさせて別れる二人だった。徐徳言は宮廷と出ると自身の邸宅に戻った。そこにも今にも隋軍が迫ろうとしていた。既に家の者達は逃げ去ってしまっている。その間に家財は彼等がその時に持ち去つたのだろつかなくなってしまうているか散乱したりしていた。家の中は昨日までのみらびやかさと風流が嘘のように荒れ果て見る影もなかった。彼はその中である者を探していた。

「樂昌、樂昌」

荒れ果てた屋敷の中を見回しつつ必死にその名を呼ぶ。

「いるか、いたら返事をしてくれ」

「その声は旦那様ですか？」

ここで部屋のカーテンの裏から声がした。若い女の声だった。

「もしや」

「そうだ、そこにいたのか」

「はい」

出て来たのは一人の淡い桃色の絹の服を着た儂げで触れれば折れてしまいそうな美しい女だった。顔立ちは切れ長の黒目がちの目を持ち白く細いもので非常に整っていた。長い黒髪を奇麗にまとめている。確かに美しいが何処か頼りなくそれが儂さを余計に表わしていた。

「まだこちらにおられたのですか」

「だがそれも終わりだ」

徐徳言は苦々しい声で彼女に答えた。

「もう隋軍は」

「はい。それでは」

「この都を去ろう」

そして妻に対してこう告げた。

「都を。今からな」

「わかりました。ですが」

「ですが。何だ？」

「この有様です」

樂昌は今にも崩れ落ちてしまいそうな顔で夫に対して告げてきた。
「何かあつて離れ離れになつてしまえば。その時は」

「そうだったな。そうなつてしまえば」

「はい。今生の別れになるかも知れません」

彼女が恐れているのはそのことだった。徐徳言もそれを聞いてはたとそのことに気付いたのだった。

第二章

「そうなつてしまえば」

「そうだな。それならだ」

ここで彼はあることを思いついたのだった。そしてまず妻に対して言った。

「鏡を持って来い」

「鏡をですか」

「そうだ、鏡だ。まだ残っているか」

「はい、こちらに」

こう言つてすぐに服の袖から鏡を出して来た。彼女がいつも持っている愛用の小さな鏡であつた。それを夫に対して差し出したのである。

「こちらに。これで宜しいでしょうか」

「そうだ、これを二つに割るのだ」

「二つにですか」

「一つは私が持つ。そしてもう一つは御前が持つ」

「私がなのですね」

「若し離れ離れになつてしまつたその時はだ」

妻の顔をじつと見ての言葉だつた。この時にも彼女から顔を離しはしないのだった。

「互いにこの鏡をなくさないようにしよう」

「わかりました。この鏡を互いの証にするのですね」

「そうだ。そしてお互いが落ち着いた暮らしを送れるようになったその時は」

「その時は」

「鏡を市に売ろう」

次に言つたのはこのことだつた。

「市にな。売ろう」

「市にですか」

「お互い生きてそれを見つけることができればよいのだ」

こう妻に言い含めるのだった。

「そうなれば再会できるからな」

「わかりました。それでは」

「去ろう。この国を」

「はい。今は」

こうして二人は共に都を逃れた。だが国が滅びる中で二人は本当に離れ離れとなってしまった。陳は滅び皇帝は井戸の中で震えているのを発見され投降が受け入れられた。隋軍の総司令官であった楊広はその投降を受け入れこれが陳の滅亡となった。中華は久し振りに統一され隋の時代になった。隋の治世は安定したもので二代の楊広が皇帝になった時はその世は安泰かと思われた。その楊広の重臣に楊素という者がいた。

一言に言えば陰謀を好み権勢を愛し贅を極め目的の為に手段を選ばない男であった。だが政治家としても軍人としても優秀なだけでなく文人としても知られていた。有事の際の決断と行動は果敢かつ的確でまさに大帝国の重臣たるに相応しい男であった。彼は多くの寵姫を持ちその数は千人にも及んでいた。酒を愛し家の者にも贅沢な生活を送らせていた。隋の都長安の己の家では日々楽しげに宴を開いていた。

「この世の極楽とはな」

「何処にありというのでしょうか」

「ここにあるのだ」

己の目の前にある美女達の舞や馳走や銀の杯にある美女を見ての言葉である。音曲と歌舞で場は飾られ色とりどりの花まであつら、その美女や名花に囲まれながら彼は贅を尽くした暮らしを送っていた。その日も同じで屋敷では今日も美女の嬌声とみらびやかな音が響いていた。だが彼はここでふと気付いたのだった。

「むっ、そっいえば」

「どうされました？」

「あ奴がおらぬな」

楊素は宴の主の席で不意にこう言い出したのである。

「見れば今は。何処だ」

「あ奴といいますと」

「樂昌だ」

この名を出したのである。杯の動きも止まっていた。

「あ奴がおらぬ。何処へ行つたか」

「樂昌様といいますと」

「陳を滅ぼした時に手に入れたあの女だ」

「ああ、あの方ですね」

周りの者達もここで気付いた。

「あ奴がおらんではないか」

「用足しでしょうか」

「探せ」

ここで楊素は周りの者達に命じた。

「どうも気になる。よいな」

「探されるのですか」

「そうだ。わかつたな」

「はあ。それでは」

「行くとするか」

「うむ」

周りの者達は主の思いも寄らぬ強い言葉に顔を見合わせた。それに従った。こうして彼等は広い屋敷の中をくまなく探し回った。そして遂に彼女を見つけ出したのである。

すぐに主にこのことを伝えた。彼は宴の主の場でこのことを聞いていた。

「して何処にいたのか」

「厨房の裏でございます」

「そちらにおられました」

「厨房のか」

それを聞いた彼の目が鋭くなった。そしてさらに家の者達に対して問うのだった。

「それではだ」

「はい」

「誰と一緒にあつた」

「誰かとは」

「当然だ。何故厨房の裏なぞにいた」

彼はその鋭い目で家の者達に対して問うのであつた。

第三章

「普通にしておればその様な場所に行く必要はあるまいに。密会していたな」

「は、はあそれは」

「その通りでございます」

家の者達は恐縮しながら主の言葉に答えた。伊達に一国、しかも隋という大国の重臣であるだけではなかった。楊素はそのことまで読んでいたのである。この辺りは流石であつた。

「男と共に」

「逃げようとしていました」

「それではだ」

楊素はまた家の者達に対して告げてきた。

「その者をここに連れて来い」

「わかりました」

「樂昌もだ」

彼女を呼ぶことも忘れてはいない。

「よいな。今ここでわしの前に連れて来い」

「わかりました。それでは」

「二人共」

こうして樂昌とその男が連れて来られた。見れば男はやつれみすばらしい身なりをしている。どうやら長い間あちこちをさすらつていたらしい。汚れた顔もまたそれを物語っていた。

だが楊素はそれに対してはあえて問わなかった。まずは彼の名を問うたのである。

「男よ」

樂昌の横で彼女と同じく縛り上げられて自分の前に引き出されているその男に対して声をかけた。

「名は何という」

「徐徳言と申します」

「徐徳言か」

「はい」

頭を垂れて楊素に答えるのだった。

「それが私の名です」

「そなたは確か陳の貴族だったな」

楊素はその名を聞いてまずはこう述べた。

「そうだったな。重臣だったと記憶しているが」

「その通りでございます」

徐徳言も項垂れてはいるがそのことを認めるのだった。

「私がその徐徳言です」

「生きておったか」

楊素は次にこう述べた。

「建康が陥ちた時に死んだと聞いていたが」

「はい、それでずっと探していました」

「そうだったな。この樂昌はそなたの」

「そうです。妻でございました」

ここで二人は互いを見合うのだった。悲しい顔だったがそれでもお互いを見るのであった。

「今まで。ずっと探しておりました」

「しかしだ。何故ここにいるとわかった」

楊素は次にこのことを彼に問うた。

「わしの屋敷にこのことを。何故わかった」

「鏡でございます」

徐徳言はこう彼に答えた。

「鏡のおかげで」

「鏡!？」

楊素は鏡と聞いてその顔を顰めさせた。

「鏡というのだ。何がだ」

「実はです」

彼はどうして鏡を話に出したのか楊素に説明した。互いに半分ずつ持ち一方が落ち着いた暮らしができるようになればその鏡を市に売る。彼は長安でその鏡の半分を見つけ買ったうえで屋敷に潜り込んでようやく妻と再会できたのである。こういうわけであった。

「ふむ、考えたものだな」

楊素は彼の話を聞き終えてまずは静かに呟いた。

第四章

「半分になつた鏡なぞ誰も買わぬ」

「それもありまして」

「そうして生き別れの妻に会つたというわけか」

「覚悟はできております」

「私事です」

徐徳言も樂昌もその項垂れた顔で彼に述べた。

「どうか御自由に」

「再会でただけでも幸せです。ですから旦那様のお好きなように」

「ふん。無論そのつもりだ」

楊素は怒らせた目で二人に対して告げた。

「けしからんことだ。今までわしが贅沢をさせてやったのにその恩を忘れ昔の夫と密会していた」

「はい」

「貴様もわしの妾を連れ出そうとした。両者共到底許せぬ」

「どうかお好きなように」

「この者達を叩き出せ」

楊素は周りの者達に命じた。

「そしてこ奴の部屋の宝を全て集めよ。よいか、全てだ」

「はい、畏まりました」

「それでは」

「何一つとして残すでないぞ」

怒らせた声でさらに命じる。

「この様な者達の顔なぞ見たくもないわ。持ち物も屋敷に置いては置けぬわ」

二人を追い出させつつさらに言うのだった。こうして二人は瞬く間に屋敷の門から追い出されそのうえ大きな布の袋を前に投げ出された。その二人の前にいたのは楊素である。彼は二人に対してこう

言い捨てたのであった。

「二度とわしの前に顔を見せるな。持ち物なぞ置いておくのも汚らわしいわ」

最後にこう言つて門を乱暴に閉ざしてしまった。ここまでまことに瞬く間であつた。二人はとりあえず再会の喜びを再び分かち合い命があることに喜んでいたがまずは袋に目をやったのであつた。

「これは一体」

徐徳言が袋を手につつてみるととんでもなく重い。また開くと樂昌が楊素から贈られた宝が全て入っていた。これまたとんでもなく価値のあるものであつた。

「これは」

「ええ」

二人はまた顔を見合わせる。そして楊素の真意を悟つたのであつた。そう、彼は再会した夫婦を助け財を与えたうえで送り出したのである。

「楊素様は我等の為に」

「この様なことを」

「有り難いお方だ」

徐徳言はしみじみとした声でこう呟いた。

「私とそなたを。こうして」

「再び結び合わせてくれて財まで」

「そうだな。全く」

徐徳言の声はしみじみとしたままであつた。

「何という有り難いお方だ」

「ええ、本当に」

二人は門の前で恭しく何度も礼をしてそのうえで都を後にした。二人はこの後故郷である江南に帰りそこで穏やか人生を仲睦まじく過ごした。毎日長安の楊素に対して礼を欠かさなかつたという。

中国隋代に残る話だ。楊素という男は確かに奸物であり後世に悪名を残した。しかしこうしたこともしているのである。悪人といえ

ども心のある者はおりその者によって助けられる者もいる。世の中というものは簡単ではなくまたそうおいそれとは言いきくせないものである。

鏡 完

2008・11・10

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2832g/>

鏡

2010年10月8日14時26分発行